1.9　千夜一夜物語と千一夜物語

アラビアン･ナイトとして知られているこの物語は、「船乗りシンドバットの冒険」、「アラジンと魔法のランプ」、「アリ・ババと 40 人の盗賊」をはじめとして、わが国でも有名ですから、誰でも一度は聞いたことかあるか、読んだことがあると思います。

これも誰でも知っていることですが、改めて簡潔にお話ししますと
妃の不貞を見て女性不信となったペルシャのシャフリヤール王は、若い女性と一夜を過ごしては次々と殺していたのですが、大臣の娘シェヘラザードは、国中の娘達の命を救うため、自ら進んで王に嫁ぎ、自らの命を賭けて、毎夜毎夜、王に、自分が知っている話をするというのが大筋。

シェヘラザードは、毎夜、話が佳境に入った所で「続きはまた明日」と打ち切るので、王は次の話が聞きたくて、別の女性を迎えることをせず、ついには、シェヘラザードを心から信頼するようになります。

物語を語り終えた最後の夜、シェヘラザードは、王の前に、二人のあいだに生まれた三人の息子を連れてこさせ、まだ自分を殺すつもりなのかと聞くのです。

その答えは、皆さんの知るとおりです。

ところで、この物語のタイトルには、「千夜一夜物語」とするものと「千一夜物語」とするものとがあるのをご存知でしょうか？
この二つのタイトル、同じような気もするけれど、違うかもと思っている方がかなりいるようで、実際に読んでいない方の中には、物語が語られる夜の数を 1000 だと思っている方が結構多いのです。
皆さんは、どう思っていましたか？

今、日本で翻訳されているアラビアンナイトでは、1001 夜にわたって語られる物語となっていて、私の持ってる『完訳千一夜物語』では、
「商人と鬼神との物語(第 1 夜 - 第 2 夜)」からスタートし、「ジャスミン王子とアーモンド姫の優しい物語（第 998 夜 － 第 1001 夜)」で終わっています。

これ、原典のタイトルはどうなっているのか、気になって見てみたのですが、
アラビア語では、この物語のタイトルは、alf laylah wa laylah
もちろん、私、アラビア語なんてできるわけもないですから、ものの本を読むと、
alf は「千」、laylah が「夜」、wa は and でした。
直訳すると「千夜と一夜」の物語。

誤解の元は、この直訳を元に、おそらくアラビア語の **wa** に当たる「と」を省略した形で「千夜（と）一夜物語」とされたことにあるのではないですかね。読み方によっては、一夜ごとに一つの話を、千夜続けたと誤解する余地はありますからね。

それはさておき、この物語、子供向けの本で読むのと違って、なかなか色っぽくて、大の大人が十分楽しめるものですが、読んでいて気づくのは、莫大な金銀財宝を手に入れる一攫千金の冒険のお話の多いことと、若くて、賢く、美しい女性が大活躍するお話がとても目立つことでしょうか。

今のイスラムの世界のイメージとかけ離れていて、イスラム原理主義なんてどこの国の話？って思ってしまいます。
ひょっとすると、今のイスラムの世界が偏狭で、殺し合いばかりしているのは、女性を大切にしないことに大きな原因があるのではなんて、つい思ってしまいます。

千夜一夜物語の中で、私が一番好きなのは、余り知られていないけれど、「薔薇の微笑のファリザード（第 774 夜 - 第 779 夜）」。
有能だけれどすぐ頭にきて前後を忘れ、石に変えられてしまう兄二人に比べて、ファリザード姫の活躍を見ていると、シェヘラザードは、王様に、本当は男性より女性の方が肝心なところでは肝が据わっていると言いたかったのかもと思ってしまいます。

さて、最後に、ろくなことを考えない男の側からのくだらない話を一つ。
1001 夜の物語を終えて、三人の子供たちと一緒に王様の前に立ったシェヘラザード。

1001 夜で 3 人？
計算足りる？

これ、男はすぐに考えるようで、
作家の阿刀田高氏も、ある著作の中で、この点に触れています。次は、その引用。

「文字どおり十月十日の懐妊期間と考えると、子供を産んでから 次の子を懐妊するまでに平均 1 ヶ月ちょっとしかなかった計算になる。」

うーむ、自分と比べてはいけないか。
それにしてもまあ、毎夜毎夜、物語の後で、××したんですかね。

3.9　澪つくし

大阪市の市章は、「澪標（みおつくし）」。余り知られてはいませんね。

先日のお話（インフラストラクチュア「**高層ビルから眺めた大阪**」参照）でおわかりのように、昔の大阪は、上町台地を除いて、その殆どが湿地帯か水の上でした。
昔の川の河口は、流れてくる土砂で水深が浅くなっているところが多く、平底の葉舟はともかく、吃水の深い船が通れる深さのある水路は限られていました。

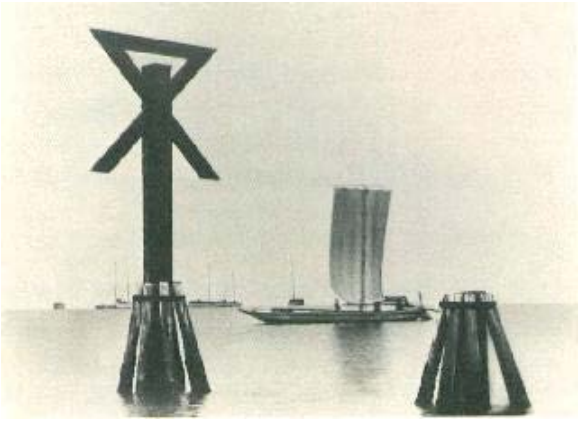
そこで、航行する船が通ることのできる深いところを示すために、標識が建てられました。それが「澪標」です。

わが国で初めて澪標が建てられたのは、延暦 23 年（804 年）。
遣唐使のための船が難波津に帰港するに際して、その安全を確保するためでした。

その後も、淀川の河口から難波津の付近では、航路を明示するために多くの澪標が建てられ、諸国の港にも波及しました。

その語源は、澪を示す串→澪つ串→「澪つくし」→「澪標」です。

元々の形は、串の上部に×を付けたもので、×が動かないよう、上にーを付けていました。
明治時代の写真が残されています。



澪標は、古来から歌に詠まれることが多いのですが、これは、多くの方がご存じなように、「澪標」が「身を尽くす」との懸け詞として用いられるからですね。

澪標を詠った歌で有名なのは、なんと言っても、後撰集の「元良親王」の次の歌です。
百人一首の一つですから、ご存知の方が多いと思います。

わびぬれば　今はた同じ　難波なる　みをつくしても　逢はむとぞ思ふ

実は、この歌、普通の恋を歌ったものじゃあないんですね。
元良親王は、陽成天皇の第一皇子にもかかわらず、天皇になれず、その鬱々とした気持ちから宇多天皇の寵愛する御息所との不倫の恋に走り、遂にそれが露見するのですが、この歌はその際に詠んだ歌なのです。

［勝手な訳］
(ことが露見し、辛い思いをしている今は、もう我が身が破滅したも同じこと、この我が身を滅ぼすことになるとしても、もう一度お逢いして、思いを遂げたいと思っています。)

この歌から、殆ど自暴自棄に近い状況下で、なお叶わぬ恋に走ろうとする思いを読み取るのは、今の私たちにはなかなか難しいと思います。

実は、この歌も、いつか述べた紅梅の「知る人ぞ知る」と同じように、源氏物語に登場しています。
源氏物語の第 14 帖「澪標」では、許されて明石から京へ戻った光源氏が、誓願成就のお礼に住吉大社に参詣した際、偶然に明石の方（流刑時代の源氏の恋人）が来合せわる不思議な縁を綴っていますが、次の歌は、源氏の華やかな行列と、自らの立場を考えて逢わずに去っていった明石の方を、源氏が思いやって贈った歌。

みをつくし　恋ふるしるしに　ここまでも　めぐり逢ひける　縁（えに）は深しな
［拙訳］
（焦がれるまでに恋していたしるしでしょうか、ここでもあなたに逢えるとは、それほど私たちの縁は深いのですよ）

この歌に涙した明石の方の返歌

数ならで　なにはのことも　かひなきに　などみをつくし　思ひそめけむ
［拙訳］
（高貴なあなたからみると取るに足らない身分の私、しかたのないことと諦めておりました。どうして、身を尽くすほどにあなたを恋してしまったのでしょう）

この第 14 帖の巻名「澪標」は、この両歌に因むものですが、
明石の方に歌を贈る前に、源氏が「今はた同じ浪速なる」と元良親王の歌を口ずさむ光景が叙述されています。それほど、元良親王の歌は当時から高名だったことがわかります。

さて、古典の世界だけでなく、澪標は、近代の詩にも登場します。

次の詩は、北原白秋の「澪」。

しみじみと　澪がわかるる
これがわかれか。
光りてながるる　みをのすじ、
光りてゆらめく　みをつくし。

澪つくしは、恋の行方と深い関係があるのです。

6.21　ゴンドラの唄

♪　いのち短し　恋せよ少女(おとめ)
　　赤き唇　褪せぬ間に
　　熱き血潮の　冷えぬ間に
　　明日の月日の　ないものを

これは「ゴンドラの唄」の一番の詩です。
おそらく、私たちの年代には、吉井勇の作詞、中山晋平作曲によるこの歌を耳にした方が多いのではないでしょうか。

吉井勇によってこの詩が作られたのは、1919 年（大正 4 年)。
竹久夢二やアールデコ、大正ロマンのまっただ中です。
芸術座の公演「その前夜」の劇中歌として、松井須磨子が歌い、絶賛を博したという記録が残されています。

私が、この歌をはじめて聞いたのは、京都祇園の名画座。
場所は、京都の祇園会館。
私、21 歳の時でした。

映画のタイトルは、黒澤明監督の「生きる」。
この中で、主人公演ずる市役所の課長、志村喬さんが、死を前にしてつぶやくように歌っているのを見たときです。

そのときから、この歌は、私の忘れられない歌の一つとなりました。
あれから 40 年以上が経ち、私は馬齢を重ねて年老い、映画の中の志村喬さんの年齢になりました。

私は、学生の頃、森鴎外訳のアンデルセンの「即興詩人」を読んだことがあり、
このゴンドラの唄の原詩ともいうべきものが､そこに載っていることは知っていました。
即興詩人アントニオがヴェニスに渡る舟の上で聞く、一人の少年が歌うヴェニス民謡。
即興詩人を読んだ吉井勇が、この一節から詩趣を得て、ゴンドラの唄を作詞したことも知っていました。

しかし、映画の中で歌われた「ゴンドラの唄」は、私の予想を完全に裏切って、人生の終わりの時期を迎えた一人の男によって口ずさまれ、この世は夢、幻のようなものだということを、ただ一瞬にして、心のどこかで理解させる力を持っていました。

歌は、しばしば、千万言の言葉よりも、直接、人の心を射ぬくことがあると思います。このような歌にどれだけ出会えるかというのもまた、長い間生きていく中での大きな喜びの一つだと思っています。

ちなみに、蛇足ですが、森鴎外の訳による「即興詩人」の当該部分を次に掲げておきます。

朱の脣（くちびる）に触れよ
誰が汝の明日猶在るを知らん
恋せよ　汝の心の猶少く（わかく）
汝の血の猶熱き間に

6.22　バッカスの歌

昨日、ゴンドラの唄についてお話ししたなかで、その原詩ともいうべきものがアンデルセンの「即興詩人」に載っているということを申しました。

即興詩人では、主人公のアントニオがヴェニスに渡る舟の上で、一人の少年が歌うヴェニス民謡を聞くのですが、ゴンドラの唄の作詞者吉井勇は、この部分に詩趣を得て、ゴンドラの唄を作詞したと言われています。私も、それを疑ったことはありませんでした。

ところがです。
1987 年、「ローマ人の物語」で有名な作家「塩野七生さん」が、その作品「我が友マキャヴェッリ」の中で、この「ゴンドラの唄」の元が、イタリアで今も愛唱されている「バッカスの歌」なのではないかという趣旨のことを述べられたのです。
私は、京都勤務時代にたまたまこれを読んで、ひどく驚きました。
この「バッカスの歌」というのは、ルネサンス時代のフィレンツェのメディチ家の当主「ロレンツォ･ディ･メディチ」が作詩したものだったからです。

（最近では、塩野七生ルネサンス著作集 1 「ルネサンスとは何であったか」で同じことをお書きになっていますが、ややトーンを落として、ゴンドラの唄の元が、イタリアで今も愛唱されている「バッカスの歌」であることを想像してみると楽しいと述べておられます。）下の絵は、ウフィッツィ美術館所蔵のロレンツォ･ディ･メディチ。

これは、さすがにちょっとした騒ぎになりました。
特に、騒ぎを大きくしたのは、「塩野さんは、森鴎外の即興詩人をご存じないのか」、と余計なことを指摘したある音楽評論家がいたものですから。

塩野さんが、ご自分で訳された「ロレンツォ･メディチ」のバッカスの歌。

青春とは、なんと美しいものか	Quante bella giovinezza
とはいえ、みるまに過ぎ去ってしまう	Che si fugge tuttavia!
愉しみたい者は、さあ、すぐに	Chi vuol esser lieto, sia
たしかな明日は、ないのだから	Di doman non ce certezza.

昨日、掲げた森鴎外の即興詩人の再掲。

　　朱の脣に触れよ、
　　誰が汝の明日猶在るを知らん。
　　恋せよ、汝の心の猶少く、
　　汝の血の猶熱き間に。（鴎外訳）

吉井勇の「ゴンドラの唄」一番の歌詞。

　　いのち短し　恋せよ少女(おとめ)
　　赤き唇　褪せぬ間に
　　熱き血潮の　冷えぬ間に
　　明日の月日のないものを

さて、皆さんは、どう思われましたか。

実は、この問題は、その後の研究で、元はどうやら一つであるらしいことがわかったのです。
簡単に申し上げますと、
ロレンツォが作詞した「バッカスの歌」は、あるドイツ人楽長が曲をつけ、イタリア各地に広まりますが、これを、ヴェネチアを旅したアンデルセンが聞き、即興詩人のなかで使用し、森鴎外がそれを訳し、吉井勇がゴンドラの唄にしたというのが、今では有力になっているようです。

このような経緯を踏まえて、改めて、このゴンドラの唄を見てみますと、日本語としては、吉井勇の歌詞が最も優れていると私は思います。これはもう、原詩がどうのこうのというつまらぬ問題を遙かに超え、極めて優れた創作に他なりません。

ご存知の方も多いでしょうが、ゴンドラの唄の二、四番は

♪　いのち短し　恋せよ少女(おとめ)
　　いざ手をとりて　彼の舟に
　　いざ燃ゆる頬を　君が頬に
　　ここには誰も　来ぬものを

♪　いのち短し　恋せよ少女(おとめ)
　　黒髪の色　褪せぬ間に
　　心の炎　消えぬ間に
　　今日は再び　来ぬものを

このゴンドラの唄には、「人の世は夢、幻のごとし」に通じるものがあり、それが私たちの心を打つのだと思います。

塩野さんは、その著作の中で、「この詩は、死をみつめはじめた人間にして、はじめてつくれる作品」であり、そうでない人間に「わかってたまるものか」とまで言っています。

黒澤明監督が、死を目前にした男に、この歌を歌わせたのは、この歌の本質を見抜いていたことを示していたのです。

ちなみに、私は、四番の詩が一番好きです。
いつまでも「心の炎」を消さないようにと思っています。

5.30　すみれとリラとライラック

札幌では、今ライラックの花が盛りです。

ライラック、フランス語では「lilas リラ」。

リラと言えば、「リラの花咲く頃」。
私、昔、5 月のパリでこの花を見、この歌を聴いてから、この花が大変好きになったのですが、なぜかこの歌は、日本では菫に変わり、「すみれの花咲く頃」として宝塚の代表的歌曲になっています。

♪　すみれの花咲く頃
　　はじめて君を知りぬ
　　君を思い　日ごと夜ごと
　　悩みし　あの日の頃
♪　すみれの花咲く頃
　　今も心奮（ふる）う
　　忘れな君　我らの恋
　　すみれの花咲く頃

ところで、「すみれの花咲く頃」の元になった「リラの花咲く頃」の歌詞は

Quand refleuriront les lilas blancs
On se redira des mots troublants
Les femmes conquises
Feront sous l'emprise
Du printemps qui grise
Des betises

［拙訳］
春がまた巡り来て、香(かぐわ)しきリラの白い花、咲く頃になれば
囁きかわされるは、愛の言葉
華やいだ春の気配に、酔いしれた乙女たちは、心ときめき、
ついしてしまう愚かな恋

ちょっとだけ余計な注を付ければ、
lilas blancs は白いリラ、よく見る紫のリラではありません。
refleuriront は、**re** がついていますので再び咲く、**Quand** は時。
redira にも **re** が付いているので繰り返し囁く、**mots** は言葉。

この歌詞には、フランス語に不慣れな方でもおわかりになるよう、脚韻をはじめとして多くの韻が踏まれており、大変美しく聞こえます。一度お聞きになることをお勧めします。
下の写真は、白いリラの花。

さて実は、この「リラの花咲く頃」にも元歌があって、ドイツ語では「ライラックの花が咲く頃」
Wenn der weisse Flieder wieder bluht,
sing ich dir mein schonstes Liebeslied.
Immer, immer wieder,
knie ich vor dir nieder,
bringe dir den Duft von weissen Flieder.

［拙訳］
ライラックの白き花、また咲く頃
私は、あなたに、心こめ、美しき愛の歌を歌う
何度も、何度でも、あなたの前にひざまづき、捧げるは白いライラックの香り。

weisse Flieder は白いライラック、**wieder bluht** は再び咲く、**Wenn** はとき。

mein schönstes Liebeslied は私の最も美しい愛の歌。

同じ曲ながら、三つの国の歌詞は、かなり違いますね。
フランスでは、恋に酔う乙女が主役。
ドイツでは、乙女に恋心を伝える一途な青年が主役。
そして、我が国では、淑やかな女性の初めてのまことの恋と大切な思い出がテーマ。
それぞれの国柄が反映していると思うのは、気のせいでしょうか。

ところで、この歌の原詩は、オーストリーの作詞家の手になるものですが、そこでは、ライラックが「ニワトコ」になっています。これは、日本のニワトコと違い、香りの高い「西洋ニワトコ」ですが、オーストリーを旅したことのある方には夏の清涼飲料水としてお馴染みの Holunder ですね。

ところで、ニワトコの古代名は、「山たづ」。
この山たづには、古代の名高い悲恋の伝説が残されています。

君が行き　日長くなりぬ　山たづの　迎へを行かむ　待つには待たじ　(万葉集巻 2－90）　衣通王(そとほりのおほきみ)

［拙訳］
いとしいあなたとお別れして、気の遠くなるほど日が経ちました。もう、私にはこれ以上あなたのお帰りをお待ちすることができそうもありません。どうしても、誰になんと言われようとも、あなたをお迎えに参ります。
「山たづ」は、二枚の葉が対になっていることから、「迎える」の枕言葉です。

これは、古来、日本最高の美女と詠われている衣通姫(そとおりひめ)の歌。
歌の相手は、姫の兄、軽太子。

衣通の名前は、その美しさが衣を通して輝いたというのですから、すごいですね。
古事記では、二人は、母を同じくする兄妹で、同母兄妹姦のタブーを犯したとして軽太子は皇太子の地位を剥奪され、伊予国に流されたとあります。
衣通姫は、命をかけて軽太子に逢いに伊予に向かうのですが、そのときの歌。

二人は、伊予で再会し、共に自害して、自分たちの愛を全うします。

菫もリラもニワトコも、この歌の中の花は、みな恋の花です。

3.21　犬たちの哀しみ

昨日、何の気なしに、テレビの報道を見ていまして、とてもかなしい思いをしたことをお話ししたいと思います。

午後 6 時のＮＨＫニュースの後の番組でしたから、御覧になった方も多いのではないかと思います。

タイトルは、「帰れない犬たち」。

福島原発の事故で、故郷の家を追われたのは、飯舘村をはじめとする人間の家族だけではなく、そこで飼われていた犬たちも、家族と別れて生きていかなければならなくなっているのですが、取りあげられていたのは、岐阜のＮＰＯに引き取られている福島県飯舘村の犬たちでした。

ドキュメンタリーではじめに登場したのは、両親と三人の姉妹に飼われていた犬。

故郷の飯舘から離れざるを得なくなった三人の姉妹は、福島で働く両親とも離れて、祖父母の家で暮らしているのですが、もちろん、飼っていた愛犬と暮らすことはできず、泣く泣く岐阜県のＮＰＯに預けているという事情でした。

中学生の三人姉妹の長女が､家族同然に一緒に暮らしていた犬の写真を見ているうちに、別れざるを得なかった愛犬のことを思って、言葉につまり、涙を流す姿を見ていると、私も胸がつまりました。
彼女は弟だと思っていると言っていましたが、彼女にとって、愛犬は間違いなく家族の一員であったに違いありません。

犬を何度か飼った経験のある私は、何回か老衰で、その死を看取ったことがあります。
長く家族同然であった犬を失うのは、愛する家族の一人を失うのと同じです。

一番の友達だったクロードをなくしたときは、辛かったですね。
本を読むのに倦んで、散歩に行こうと、クロード！と呼びかけようとして、「あ、クロードはもういないんだ」と思うと、心の中を風が吹くような気がしました。

まして、飯舘の彼女の場合、突然襲ってきた理不尽な理由での生き別れです。
どんなに悲しいだろうかと思うと、こちらの胸まで張り裂けるような思いがしました。

「かなし」という言葉は､本来､自分の力ではどうしようもない切なさを表す言葉です。

「悲しい」という字の上半分は、羽が反対に開いた状態を示しており、心と胸が裂ける

という気持ちを表しているのです。

彼女の心は、単にかなしいのではなく、本当の意味で「悲しい」のです。
それが、見ている私の胸に直接突き刺さってきたのだと思います。

さらに、私が、とても辛い気持ちになったのは、飼い主と別れて、狭いオリの中に入れられ、カメラの方を見ている犬の目を見たときです。

もの言えぬ犬の目は、哀しいものでした。
私は、自分が飼っていた犬があのような目をしたのを見たことがありません。

今では、余り区別されることがないのですが、「かなしさ」を表す文字には、「悲しい」という文字を使う場合と「哀しい」という文字を使う場合があります。

「悲しい」が、張り裂ける心のかなしさを表すのに対して、「哀しい」は、口に出しては言えない、辛く、切ない思いを自らの胸に納めて、堪え忍ぶ場合に使われるのです。

哀しいの「哀」という字は、「衣」という字の間に「口」という字が入っているのですが、これは、衣で自分の口を覆って、心から流れ出る辛く、切ない気持ちが外に出るのを耐えている字なのです。

もの言えぬ犬の目は、私には、間違いなく、「哀しい」心を湛えているように見えました。
こちらの方が、本当は、深く、傷ついているのだと思います。

このような、多くの悲しみや哀しみを、もし、誰かの怠慢や奢りや無責任がもたらしたとすれば、私は、やはり、深い憤りを感じざるを得ません。
たとえ、法律に反していないとしても、その故に処罰されることがないとしても、私は、彼らを許す気持ちにはなれないと思います。

早く、人だけではなく、彼らにも、一日も早く元の生活が戻ってきますように、願ってやみません。

3.23　高楼（たかどの）

毎年、この季節になると、各地で、卒業式が行われます。
私が昨年まで努めていた仙台の学校は、残念なことに、今年、卒業式を断念せざるを得なくなりました。
でも、公式な卒業式…正確には学位記授与式というのですが…これができなくても、教員に感謝の気持ちを表す内々のお別れ会のようなものは、小規模な形で行われているようです。

そういった会で、今でも歌われることが多いのは、「惜別の歌」。

♪　遠き別れに　耐えかねて　この高殿に　のぼるかな

で始まるこの歌は、昔から今日まで、長い別れを惜しみ、別れていく相手の幸せを祈るこころを伝えるものとして歌われてきました。

その原詩は、ご承知の方も多いと思いますが、島崎藤村の「高楼（たかどの）」です。

藤村の若菜集にある「高楼」は、嫁いでいく姉と別れを惜しむ妹が、互いにその思いを交わし合う形をとっています。
詩はすべてひらかなによって書かれています。少し長くなりますが、あえて全文を引用しておきます。

わかれゆく　ひとを　をしむと　こよひより　とほきゆめちに　われや　まとはん

妹
とほきわかれに　たへかねて　このたかどのに　のぼるかな
かなしむなかれ　わがあねよ　たびのころもを　とゝのへよ
姉
わかれといへば　むかしより　このひとのよの　つねなるを
ながるゝみづを　ながむれば　ゆめはづかしき　なみだかな
妹
したへるひとの　もとにゆく　きみのうへこそ　たのしけれ
ふゆやまこえて　きみゆかば　なにをひかりの　わがみぞや
姉
あゝはなとりの　いろにつけ　ねにつけわれを　おもへかし
けふわかれては　いつかまた　あひみるまでの　いのちかも
妹
きみがさやけき　めのいろも　きみくれなゐの　くちびるも
きみがみどりの　くろかみも　またいつかみん　このわかれ

姉
なれがやさしき なぐさめも なれがたのしき うたごゑも
なれがこゝろの ことのねも またいつきかん このわかれ
妹
きみのゆくべき やまかはは おつるなみだに みえわかず
そでのしぐれの ふゆのひに きみにおくらん はなもがな
姉
そでにおほへる うるはしき ながかほばせを あげよかし
ながくれなゐの かほばせに ながるゝなみだ われはぬぐはん

ところで、現在、歌われているの「惜別の歌」は、このうちの次の部分です。
　遠き別れに　耐えかねて　この高殿に　のぼるかな
　哀しむなかれ　わが友よ　旅の衣を　整えよ

　別れと言えば　昔より　この人の世の　常なるを
　流るる水を　眺めれば　夢恥ずかしき　涙かな

　君がさやけき 瞳の色も 君くれないの 唇も
　君がみどりの 黒髪も またいつか見ん この別れ

この惜別の歌は、旧制中央大学予科学生だった藤江英輔氏が、学徒勤労動員によって働いていた工場から、次々と戦場に赴いていく友人達を送る歌として、曲を付けたものとされています。「我が姉よ」が「我が友よ」に変えられているのは、そのとき戦地へ赴く友への心情のなせるところでした。

この「惜別の歌」は、戦後中央大学にもどることができた彼らの中から、その後輩たちへと受け継がれ、学生歌として定着したものですが、原詩と異なり、別れがほぼ死別につながることを意味した切実な思いを､美しい曲の中に見出すことができると思います。

今、平穏な世の中での別れの曲として歌われているこの歌が、今年は、被災地の学生達によって、特別の思いを込めて歌われたのではないかと思っています。

3.26　三椏の花

私の家の近くにある公園で、「三椏」の花が盛りになりました。
あ、この「三椏」という字、何と読むかご存じですか？
これ、「みつまた」と読むんです。

写真左は、三椏の花。写真右は、オレンジ色の花を付けた赤花三椏。

みつまたは、「こうぞ（楮）」と並ぶ、和紙の原料となる木です。
わが国の紙幣の素晴らしさは世界でも群を抜いているのですが、一万円札などの紙幣は「みつまた」でできていると聞いています。

みつまたの漢字、三椏の「椏」は、木の股のこと。
実物の木を見るとすぐわかりますが、みつまたの木の枝は、すべて三つに分かれていて、この字も読み方も、まさに読んで字のごとしです。

ちょうど今あちこちで咲いている沈丁花とは親戚で、花の形もよく似ています。
なによりも親戚だということは、沈丁花と似たこの花の香りからもわかります。

みつまたは、万葉集にも「三枝（さきくさ）」の名で 2 度登場します。
［ちなみに、この三椏の古語、三枝は、三枝（さえぐさ）さんの名の由来でもあります。
あ、三枝（さんし）さんではありませんので念のため。］

一つは、柿本人麻呂さんの恋歌でかなり有名なものですので、ご存知の方もおられると思います。

春されば　まづ三枝（さきくさ）の　幸（さき）くあらば　後（のち）にも逢はむ　莫恋ひそ吾妹（な　こいそ　わぎも）　　（万葉集-1895）

［拙訳］

（命さえ長らえていれば、いつか春がきて、きっと逢うことができましょう。春になれば、真っ先に咲くみつまたの花の名のように。吾妹よ、別れの苦しさにこれ以上胸を痛めないでください。）

もう一つは、山上憶良さんの長歌一首と短歌二首。
これは、憶良さんが愛する我が子「古日」を失った時の挽歌。

世の人の　貴び願ふ　七種の　宝も　われは　何せむ　わが間の　生れ出でたる　白玉の　我が子古日は　明星の　明くる朝は　敷栲(しきたへ)の　床の辺去らず　立てれども居れども　共に戯れ　夕星の　夕べになれば　いざ寝よと　手を携はり　父母も　上は勿下(なさか)り　**三枝(さきくさ)**の　中にを寝むと　愛しく　其が語らえば　…以下略

［拙訳］
（世の中の人が欲しいと思う様々な宝など、私にとってはどうでもいいのです。私達の間に生まれた愛おしい子古日は、私にとって何物にも代え難い真珠なのです。この子は、朝からずっと一日中私たちとともに遊び戯れ、夕べとなっても、私たちの手を取って、僕の傍を離れないで。父さんと母さんのまん中で三人一緒に寝るんだ。と可愛く言うのです。略）

しかし、それだけ愛おしんできた愛児古日は、突然病に倒れ、憶良らの祈りもかなわず、息絶えます。老いた憶良は、「立ち躍り　足すり叫び　伏し仰ぎ　胸打ち嘆き」自らの運命の苛酷さを悲しみ、嘆くのです。

反歌
若ければ　道行き知らじ　幣(まひ)は為む　黄泉(したへ)の使　負ひて通らせ　(905)
［拙訳］
（この子は幼くて、黄泉への路も知らないと思うのです。黄泉の国の使者の方、どうか、この子を背負っていってくれませんか。こころからの贈り物をしますので、どうか、どうかお願いします。）

布施置きて　吾は乞ひ祈む　欺かず　直に率行きて　天路知らしめ　(906)
［拙訳］
（お布施を置きますから、どうか、お願いします。この子が黄泉の旅の途中で迷わずにすむよう、必ず天国へ案内してくださいますように。）

この長歌を読むと、愛する子供を失った親の激しい嘆き、絶望の苦しみを直接感じることができます。

また、二つの短歌からは、子供をたった一人で黄泉の国に行かせなければならない親のせめてもの願いが、私に伝わってきます。

みつまた（三椏）を詠みこんだ万葉の歌の一つが、このような愛する子供との突然の別れを悲しむ親のこころを詠ったものであることを思い出しつつ､この花を見ていますと、祈りの気持ちがしみ出してきます。

今回の地震で、お子さんを亡くされた沢山の被災者の方々に、鎮魂の祈りを捧げたいと思います。